

研究タイトル：

日本近代における政教関係

氏名： 牧之内 友／MAKINOUCHI Yu E-mail: makin@hakodate.ce-ac.jp

職名： 准教授 学位： 修士(文学)

所属学会・協会： 日本宗教学会, 歴史学研究会, 日本史研究会

キーワード： 日本近代史, 宗教政策, キリスト教, 国家神道

技術相談

提供可能技術：



研究内容：

近代日本の政教関係については、村上重良氏や藤谷俊雄氏らのいわゆる「国家神道」論の枠組みで長らく説明されてきた。すなわち天皇家の皇室神道を中心に(ときに神社神道も合わせて)、諸宗教に超越した「国家神道」を形づくって国民の教育・道徳までも規定し、その中でキリスト教や新宗教、あるいは伝統的な神道までも抑圧したが、その体制はほぼ一貫しており、明治期に成立・展開し、昭和戦前期に絶頂を迎え、1945(昭和20)年の敗戦と共に崩壊した、というものである。この立論の背景には昭和戦前期の宗教弾圧への深い洞察がある。

しかしながら阪本是丸、中島三千男、安丸良夫、宮地正人、高木博志、羽賀祥二、赤澤史朗、子安宣邦の諸氏らの実証的研究により、明治・大正期の政策の振幅、多様性が明らかとなり、また近代日本における「宗教」概念の西欧からの導入・成立を検討し、「宗教政策」そのものの自明性を問う山口輝臣、磯前順一、桂島宣弘の諸氏、いわゆる宗教に限らない学校教育などにおける国家道徳的イデオロギーとして「国家神道」論を捉え直そうとする島蘭進氏らの諸研究によって、従来の「国家神道」論はその用語仕様の当否も含めて、批判され尽くした観がある。

だが昭和戦前期については、近代日本の政教関係の必然的帰結、本質顕現的なものと見るか、あるいは戦時という歴史的特殊条件に規定された逸脱、特殊な状況と見るかはともかく、従来通りの「国家神道」的説明で描かれることが多い。近年、この時期の日本の植民地・占領地における宗教政策や海外布教への関心が高まり、多くの研究がなされており、国内の宗教政策そのものも改めて検討する必要がある。

特に戦時期に国家との緊張を強いられたキリスト教を中心として、この時代の様相を描きたいと考えている。

また、日本近代の歩みの中で、北海道はいわば「国内植民地」的な位置づけを持つ地域であり、ここにおける宗教行政の有様は、海外植民地のひな型というべき点が少なくない。そのような観点から宗教行政も分析していきたいと考えている。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	